



(號三十八百二第)

經から觀た國、國から觀た經 主任 松尾鼓城

軍人と修養 大僧正 本多日生

日蓮聖人教義綱要(第十三回) 僧正 井村日咸

法華經流布の時代 文學士 小林一郎

機微譚語 怨靈平凡 山根青村
六四 六五 六六 高野の佳品

課題和歌「萩盛」發表 子爵 清岡長言選

統一俳句(題南瓜、菊合)發表

本誌記者に與ふる書 在大連 江見乾丈

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發
▶番三三五三三京東座口替振◀

著師生日多本 正僧大

覽天賜 大藏經要義

菊判洋裝上製函入美本 正價各壹圓八拾錢 內地送料 各拾貳錢

大方廣佛華嚴經(八十卷) (一)華嚴經の大觀 (イ)總論
(ロ)此經の位置 (ニ)此經の教主 (三)此經の說時、說處、說者
(ハ)華嚴宗の略歴 (ニ)華嚴宗の列教 (ト)華嚴宗の教後 (チ)傳
教の批判 (リ)日蓮の批判 (ヌ)予の華嚴觀 (ニ)此經の傳
譯 (三)此經の譯者 (四)此經の五玄 (五)此經の傳
通覽(六)要文の講述

○本書は隔月發行十八卷(三ヶ年)完結、一ヶ年前金九圓、半年間五圓、送
料不要、卷八迄三百三十六圓九百五十七圓、卷六迄三圓、既刊目次左の通
井上(智)博士叙 撰述の旨趣

心地圖經 (七卷) 佐藤中將序
仁王經 (二卷) 德樂齋成經
大菩薩經 (十卷) 大菩薩經
付録 報恩の道德と義務の道德(崎崎博士)

阿含正行經 (十卷) 阿含經
首楞嚴經 (十卷) 阿含經

大般涅槃經 (丁一八(十八卷))
大般涅槃經後分 (二卷) (廿六卷)
佛大般涅槃經等十經 (廿六卷)
增一阿含經 (五十一卷)

中阿含經 (六十卷) (六十卷)
長阿含經 (二十卷) (五十六卷)
別譯阿含經 (廿二卷) (五十六卷)
雜阿含經 (五十卷) (五十卷)
佛行本起經等六經 (五十卷) (五十卷)
四十二經 (一卷) (一卷)

新刊 日蓮聖人正傳

四六判聖人肖像等入振
假名附四百五拾餘頁正
價金九拾五錢送料共

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正七年八月十五日發行(毎月一圓十五日發行)

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊) 發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯發行人松尾英四郎印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五圓)

版五 日蓮主義

三五判洋裝函入眞蹟挿入
美本六百五十頁正價金九
拾五錢送料六錢

次目 一、宗教の必要と其選擇
二、神佛三教と日蓮上人
三、國民道德と宗教の信仰
四、統一的佛敎觀
(付録)本經、祖書要文

六、釋尊の出家成道
七、佛敎の體系
八、法華經の體系
九、日蓮主義の體系
十、終法次第

版四 修養と日蓮主義

三五判洋裝五百六
十頁其他正價送料
共同斷

次目 一、日蓮主義の主張
二、社會問題と日蓮主義
三、修養と日蓮主義
四、日蓮聖人と女性

五、日蓮主義より見たる大涅槃經
六、日蓮聖人の信仰
七、日蓮主義の體用道
八、日蓮主義の體用道

版再 國民道德と日蓮主義

三五判洋裝
四百七十餘
頁其他正價
送料同前

次目 一、日蓮聖人の觀たる我が國體
二、國民道德と宗教の信仰
三、國民道德と模範的人格
四、國家觀の根本問題

五、修養の三方面
六、佛敎の理想的文明
七、日蓮聖人遺文の一篇

人と教

四六判洋裝函入眞蹟挿入假附
本三百八十餘頁正價金壹圓貳拾錢
送料八錢

版再 法華經の心髓

四六判洋裝振假名附四
百二十頁正價八十錢送
料共

次目 一、人と教
二、精神の修養
三、三大思想の系統と調整統一

四、教育と宗教
五、佛敎の信條
六、法華經より見たる佛敎

大藏經要義刊行會

一名如來壽量品統釋 項目八十八ヶ條
東京市外南品川妙國寺内(振替東京三一五九六)

國民思想大講演會紀念撮影

大正七年十月十七日

縣立女子師範學校於此主辦宇都宮國會



- | | | | |
|------------|-----------------|----------------|-------|
| (前列向つて右より) | 安國幹事 中村 温男 | 同 | 野島 速平 |
| | 砲兵少佐 田中關四郎 | 同 | 窪田 貞二 |
| | 砲兵大佐 安東 斌 | 同 | 龜井 利一 |
| | 統一團講師 高木 木順 | 安國會幹事 | 久保井倉吉 |
| | 海軍中將 佐藤鐵太郎 | 妙金 寺 野澤 照真 | |
| | 統一團講師 松尾 鼓城 | 法華 寺 大川 圓精 | |
| | 宇都宮市長 谷 誠之 | (後列向つて右より) | |
| | 縣立女子師範學校長 古市利三郎 | 安國會員 野島 草民 | |
| | 砲兵中尉 白井 儉吾 | 安藤銀五郎 | |
| | 安國會理事 進澤佐一郎 | 慶應醫科大學 生 丸山 義道 | |
| (中列向つて右より) | 安國會員 高橋 貞 | 安國會幹事 佐藤豊太郎 | |
| | 同 内山港三郎 | 同 夢倉竹次郎 | |
| | 統一團幹事 高橋 辰二 | 同 山田豊次郎 | |
| | 同 齋藤 重司 | | |
- (上欄・壇上にあるは佐藤將軍閣下なり)

經から觀た國、國から觀た經

法華あつての一切經であるが、その法華經も畢竟壽量品あつての法華經なりとしたならば、一切經も壽量品あつての一切經に過ぎないと云ひ得らる。壽量品なくんば天に日月なく人に魂のなきが如しの格言は、斯間の消息を洩したものである。

如上の意味、之を國の上に換用し試みて見たい。日本國は法華經なりとして見る、皇室は壽量品であらねばならぬ。日本國體の光威尊嚴は畢竟皇室あつての結果であるからである。而して世界萬國は一切經なりとして見た場合、華嚴の獨逸、阿含の佛蘭西、方等の英國、榮若の亞米利加など、假りに當て嵌めて見る、しかし其中に法華の太陽經たる日章旗耀く日本國が現れねば世界萬國が如何に蘭菊芳競しても大なる意義が現れぬのである。

前の意味を經典から觀れば、一切經の諸經典の中には、之を國家的に譬ふれば共和政治のもあらう、帝國主義(我日本的でなく西)のもあらう、獨立國としての力なく屬國としてゝなくては立ち行かぬ國もあらう、植民地に過ぎないものもあらう。しかし其中に君民一致の君主立憲國、國王は主師親を具備したる而も仁慈にして允文允武なる聖天子總ます國體の大日本たる法華經の嚴存するなくんば一切經も無意味であるのである。

國から經典を眺めて見て法華經——壽量品——經から國を眺めて見て日本國——皇室——而して經に於ての法華經主義の一切經の開顯は終つて居る、日蓮聖人の遺文はそれである。乃至ちかく本多殿師の大藏經要義の如きも即ち其れである。而も國に於ての大日本國主義の世界萬邦開顯の大仕事は何時であるか、誰がこの大事を成ずるものである乎。

軍人と修養

(本講は曾て野砲兵第二十聯隊下士集會所に於て宇都宮師團將校諸君の爲に開演せられたるものを白井少尉の要領筆記せられしもの、未だ演者の校閲を経ず、文責筆記にありといふ)

本多日生

近來修養と云ふ聲が漸く高くなつて來まして、それに關する著書も澤山出て又種々の方法もやつて居りますが、どうも小さな考へから其時々に応ずるやうにのみ案出されたのが多いやうである。而しそれ等は其時にこそ適切のやうに見えても、少し時が立てば効力が無くなるのである。修養に關しては古來聖人の學として種々論じて居りますが、偏々たる修養法は然る而日亡と申しまして、的然即ちはつきりと見えて、其時には如何にも立派であつても、小人の道は日にく、に何時となく亡んで行きます。然るに君子道暗然而日章と申して、眞實の修養の方は一時は暗然とて、ぼんやりとして居て、つまらぬやうでも日々章となつて、永

く其の効力を失はないのであります。近代人の修養は皆的然として日に亡ぶやうですが、軍人としては、それははいけません。暗い一時的な勝手な事をやつて居るのは感心した事でない、軍人は軍隊内務書網領にもあります如く、精神は精神を以て教育せねばなりませんから、是非共、眞實の大きな章な修養を致さねばならぬ。

なさないとあります、そうすれば、誠とは如何なるもので、如何にせば培養されるか、修養の出発點、根本問題であります。それをせず、忠君愛國を求めると、無理はありますまいか、此が今日お話をする點であります。誠を磨く、是が君子の道で、必要なる事に迫られて行ふのは小人の道である。即ち小人の修養法と、根本的修養法と分るわけです。之を例へると前者は水を求める必要に迫られて、桶や、バケツや鐵瓶を持つて何處か水はないかとさがし廻るやうなもので根本的に井戸そのものより水を出すやうにせない、如何に水が欲しくても、井戸を掘らねばだめです。經濟は商人に、労働問題は労働者に、兵士には愛國と云ふやうに必要の方のみから要求して來る之を枝學と申します。聖賢の教は其根本を養ふのです。其根本となるのは誠であります。枝學では同じく誠と云つても不透明でぼんやりして居ます、日本の或部分の人に如何んな事にも誠といふことを濫用して居ます。教育家は

新らずとも神や守らむと申して、誠が何であるかを究めず、只誠と云つて無暗に宗教を排して居ます、儒教では誠は何う解して居るかと思ふに、誠は天道、天地の間に存して居ると申します、其の誠を得んとする所を道と云ふのであります。誠は大徳と申して一切の徳を有して居る天道です、又一方には生成化育と謂つて、恩愛であります。尙天に備つて居る誠は四時運行です、此の宇宙間にある萬世不磨の大規律と、大恩恵とであつて、それを誠と云ふたのです。又天を思ふは誠と申しまして、やさしい心、正直な心とも云ひませうか、

が、此の直心が芽を表はせば非常に強い力を出して來ます。其心は即ち誠であつて、鬼神も泣かすものは何かある人の心の誠なりけり

の類廢を憂ひて、教育家などは、いろい

満身眞面目にして、絶對の權威と無限の悦との中に起つた誠を云ふのである。純一にして雜駁ならぬ、混ぢらない、衷心より出て、偽らないと云ふのです。又明德と申しまして、光明を放ち、百千萬人我往んといふやうな限りなき力を云ふので今この言葉では天地の靈性の誠とも云ひ得るのである。佛教の方では眞心、又は直心とも申します、質直意柔、或は柔和質直者と云つて非常に優しい心です

と云ふやうな力があります。鎌倉武士が修養に用ひたと云ふ首楞嚴經と云ふお經があります、之に直心眞心が説明してあります、一度此心起せば惡魔も何ても平げられるとて誠を修養したのであります。直心は一方に於て勇であるが又一方には智慧となつて動いて來る、當らずと雖も遠らずとは誠の事を云つたのです、例へば子を養ふ事を習つて嫁ぐものはありませぬ、子が生るれば直に可愛いと云ふ、誠が働いて來るか、それが智慧となつて活動して、立派に子を養ふ事が出来るのである。御勸諭にも一誠以て貫けと教へられてあつて、五ヶ條は皆必要であるが一の誠心さへあれば、其の働きが武勇とも信義とも質素ともなつて表はれて來るのであります。修養をなすに大切な點は如何にせば誠が表はれて來るかと思ふ事です、現今思想

個人々々の切磋琢磨は何程やつても駄目である高島嘉右衛門先生は「至誠無息」を、ヤムナシでなく、イキスルナシと訓ぜられたがその且息をせず、堪えて居る所に誠、即ち天道の道が顯はれて來ると申しました。

徳川時代の初期には儒教學者は、經書を講ずるに先つて、

赫々在上、明々在下、有心私曲夫厭吾と唱へたものであります、是等は皆宗教的色彩を帯びて、それで、修養の徹底を計つたのであります、現今の教育法には宗教を厭ふ傾向があるのは、實に遺憾です、但弊害のある點だけを捨て、宜い所は取つたら、よからうと思ひます、我日本の神道は已に宗教的であります、勅諭の解らない所は御製と併せ拜する能く解ります、

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ
目に見えぬ神に向ひてはぢざるは
人の心の誠なりけり

是等の御製は皆神の實在を信じなければ解りません、之を解するには宗教的情操を必要とするのです、日本の神道は鏡が本體であります、向ふたび己が心を磨けとや鏡は神や作りそめけん、

皆宗教的であります、宗教を嫌ふなら、日本國體から作り換へなければなりません

日蓮聖人教義綱要 (第十三回)

井村日成

第四章 教法論

第壹節 從一出多

之より各論の第二として教法に就てお、漸を致します、教法に就ての大體は第一章第二節第三節にお漸致してあります、更に詳しくお漸を致します、一體如來の教法は幾多にも分裂して居るべき筈のもではない、然るに何故に澤山に分れて来たのであるかと申せば、教法を受ける衆生の根性が區々であるから、隨つて之を導く教法が幾多にも分裂したのである、然し其教法の根源は一法である、其一法の根源より無量の義を開出して幾多の根性に應同して之を導かれたのである、無量義經說法品には其の意味を最も明白にお説に相成つて居る、即ち經に(縮刷法華經一五頁)

日蓮聖人教義綱要

ん、愛國の教を與へながら其根本を否定して居るのです、そんな事では誠を暗らまして居るから駄目です、元に還らなければなりません、佛敎では信仰と云つて居りますが、直心を以て絶對者に隨ふのを信仰と申します、それを佛に對する時は一切の心が磨かれると云ふのです、

信爲道元、功德母、長養一切諸善法。以信得成不動智、智清淨解眞實。(華嚴經)と云ふ文句が經にありますが、實に善

●聖典の一節 二去し文永八年九月十二日申の時に平の左衛門の尉に向て云く。日蓮は日本國の棟梁也予を失ふは日本國の柱礎を倒すなり。只今に自界反逆離とどしうちして。佗國侵逼難とて此の國の人々他國に打ち殺るのみならず多くいけどりにせらるべし。建長寺、壽福寺、極樂寺、大佛、長樂寺等の一切の念佛者禪僧等が寺塔をば焼はらいて。彼等が頸を由比が濱にて切らずば日本國必ずほろぶべしと申し候了。第三去來文永十二年四月八日左衛門の尉に語て云く。王地に生たれば身をば隨へられたてまつるやうなりとも心をは隨へられたてまつるべからず。念佛の無間地獄禪の天魔の所爲なる事は疑ひなし。殊に眞言宗が此國土の大なるわざはひにては候なり。大蒙古を調伏せん事眞言師には仰せ付けらるべからず。若大事を眞言師調伏するならばいよいよ急いで此國ほろぶべしと申せしかば。頼綱問て云く何頃寄せ候べき。予云く經文には何時とはみへ候はねども。天の御氣色いかりすくならず急に見へて候。よも今年はずごし候はじと語りたりき。此の三つの大事は日蓮が申したにはあらず。只偏に釋迦如來の御神我身に入りかわらせ給ひけるにや我が身ながらも悦び身にあまる。

此は衆生の苦海に沈淪して出る期なきの有様を示されたるなり。善薩摩訶薩諦かに觀じて憐愍の心を生じ、大慈悲を起して將に救拔せんと欲して又復深く一切諸法に入り乃至衆生の諸の根性欲に入る。衆生苦惱の有様を見て大慈愍の心暫くも捨て給はず、如何にして斯の苦の衆生を度せんかと諸の衆生の根性欲を觀察し給ふを明かしたのである。性欲無量なるが故に說法無量なり、説法無量なるが故に義亦無量なり。衆生の性欲千差萬別にして到底一法の下に之を律すべからざるを知りて無量義を説いて差別の性欲あるを度し給ふ、茲に於てか、佛陀の教法は幾多の義門を開出して分裂せるが如きの相狀を呈した

のであるが、而も如來の教法は、其目的とする處は苦の衆生を度脱せしめんが爲めなるが故に無量義を開出して無量の得益を得せしめたるも、元來無量義は一法より開出したるものなれば、其所詮は亦一法に結歸すべきは當然の事である、今經開出の方面を説いて、結歸する處を悉さざるも、其開出の理由は衆生の根性欲に隨へるものなるを説いて、其開出の幾多の教法は總て佛陀の眞意にあらず、方便の教法なる旨を明示せり、故に經には引續いて、無量義は一法より生ず、其一法とは無相なり。と説いて、諸法實相(無相と云ふも其意味は同じ)の一法より無量義を開出せるを明し、更に其は方便の假説なるを説いて性欲不同なれば種々に法を説き、種々に法を説くこと方便力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯さず是の故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずることを得ず。と説かれた、此文は權教實教の區別を示すに就て最も明確にお示しに相成つて居

るので古來此文を權實の榜術と唱へて居る、村と村との境界にある棒杭である、權實の教村と實教村との境界線である、之を要するに一法の實相より開出したる無量義は凡てこれ隨他意の方便權教と云ふこととに、相成るのである、簡單に之を大別すると如來の教法は二つになる。

隨他意 方便 權教 九界の法
隨自意 眞實 實教 佛界の法
隨他意の方方便教は三乘(聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘)五乘(天乘の二を加ふ)七方便(乘に別教の三乘、通教の三乘)九法界(人界、天界の六道に三乘を加ふ)と種々の區別になつて居るが、九法界の中の六道は元より迷の世界にて、吾等衆生は無始以來輪廻せし處なれば、佛陀の教に依つて殊更に異なつた人道天道と云ふものが出来た譯では無いが、佛陀の教訓の中に人として踏むべき道、生天の道杯を御説きに爲つた故やはり佛陀の教として、佛陀九界の法を説き給ふたと云ふ、然し此は佛教としては主たる目的ではない、六道の迷界より出離せしむるのが佛陀の教の目的である故に、聲聞界以上に導くのが佛教の目的である、然して聲聞等の三

乗は其究竟目的ではない、究竟目的は佛乘を與へんが爲めにお説きになつた佛教にはあるが、衆生の根鈍にして佛の教に入る能はざるに依つて、六道の迷界と佛陀の悟界との中間聲聞緣覺菩薩の三乘法を説いて誘導せられたのである、故に三乗の教と云ふのは一乗教の中より開出したる一部分的教義と云ふてよい、方便品に(編輯八八)

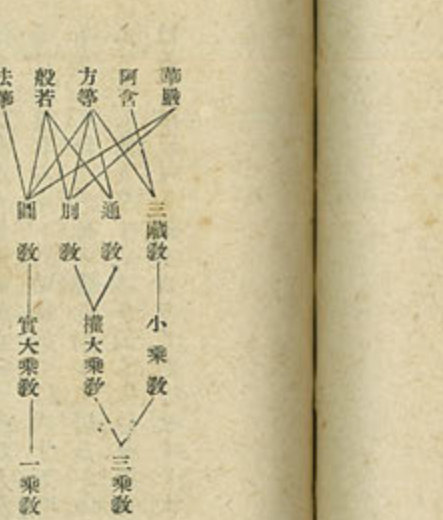
一佛乘に於いて分別して之を説き給ふとあるは此意味である。故に佛陀四十餘年の説法は、衆生を誘引せんが爲めに假説したるものなれば、其所説の教理等亦隨つて假説たるを免かれず、之等の經に於いて眞しやかに説きし事は、後に至つて方便なり權説なりとして佛自ら之を打消して居らるゝ、此等の方便教を信する人々はこの點に於いて大に考慮せねばならぬ、佛陀は虛妄の法を説きになつて居らるゝ、然し此は衆生誘引の手段としてお説きに爲つたのであつて、何等の目的なしに人を欺くのと違ふ、目的なしに人を詐するならば此は眞實の虛偽である。大目的の爲めに假説する虚偽は

の宗派を除いては皆方便虛妄の教を以つて其宗旨と爲して居る、天台宗は元は法華經連門の教に依つたものであるが、現今の天台宗は眞言と念佛との混合したもので、法華經の意味杯はほとんど御存じ無い、今の日本の佛敎は、本來無一物の空虛なる佛敎である、此は佛陀金口の誠説である、法華經には最も精密に、明白に理義整然と懇説せられてある。

第一章第二節には三乘一乘の關係小乘大乘等の區別の事を申上げて置きましたから、唯今は天台大師如來の一代を五時と分けられたに就て少々申上げやうと思ふ五時とは如來五十年間の説法を左の五つに分けたのである。

華嚴の時 成道の時より三七日の間
阿含の時 十二年の間
方等の時 十六年の間
般若の時 十四年の間
法華涅槃の時 八年の間
此中前の四時は方便の説法で、後の一時は眞實の説法である、其所説の教法に就つて言ふならば、

法華經流布の時代



前四時は三藏教通教別教等の三乗の教を主として説いた、圓教と云ふ一乗の教もあるが、從であるから、ほんの其意味を加味したに過ぎぬ、法華經が専ら一乗の教を説いたのである、法華經以前の諸經は、一法より開出したる無量義をば隨時隨所に散説したのであるから、一も取經めが付いて居らぬ、從來佛敎を研究したものが、佛敎には取留めた教が無い、散漫たるものである杯と批評するのは、無量義の方便權教許りを見て居るから、佛陀の眞意も分らず、其究竟目的も分らず

法華經流布の時代

吞氣時代の遺物

文學士 小林 一郎

そこで今までは吞氣であつたが、時代

は是からである。實は日本は今までは餘り吞氣であつた。日本は三千年の間世の中が泰平であつたから吞氣に過して來た

して、佛敎は分らぬものだと言ふのである、若し其研究方針を誤るならば百年大藏に没頭するとも佛敎の一端だも了解することは出来るものではない、何如なる學問でも技術でも、其根本を捉へずして枝葉のみに囚はらるゝならば到底其實相を判明し得ることは出来ないと同様である、佛敎如何に廣しと雖ども、無量義は一法より開出したるものなるを知つて、無量義を捨て、根本の一法を取ることが出来たらば佛敎は直に了解し得ることが出来るのである、本節には無量義は一法より開出したるものなるを示して、其無量義は方便假設の言説であることをお断致したのである、此開出したる無量義は如何に結束するかは次節に於いてお断をする。

それも結構であるけれども、餘り呑氣過ぎて一生懸命にならない。私共は世界の言葉は能く知りませぬ、二三の言葉より知りませぬが、一體日本語程面倒な言葉は他に無いと思ふ。例へば代名詞で申して是れば、英語なれば「ユー」の一語で總てに通ずる、所が日本語になると、「貴方」とか「お前」とか「貴様」とか「貴殿」とか「あなた」とか、何とかもう大變なものであります。「私」と云ふことも英語なれば「アイ」で宜いのであります、それが「私」とか「あれ」とか「おいら」とか、「拙者」「手前」「小生」「やつがれ」となかく面倒である。代名詞一つでも二十通り三十通りも使ひ分けなければ世の中が渡つて行けない。此人には何と言つたものであらうか、「私」と言つたものであらうかそれとも「あれ」と言つて宜からうか、今日の時代はそんな事を考へて居る暇は無ないのである。向ふからは電車が来る、此方からは自動車がある、其時に、此人には「閣下」と言はうか「現下」と言はうかと、そんな事を考へて居れば轢かれてしまふ。忙がしくなるとさうはいかぬ。

言葉が面倒臭いと云ふのは閑だつたと云ふ證據である。世の中の事が非常に面倒臭くつて、取次がなければ主人が出て會はなかつたのであります。是等は皆人間が閑だつたからである。所が今日は、其閑だつた時の氣分を失はないに拘らず世の中は實際には忙がしくなつたのであります。閑であつた時分の量見が無くなつて居らないのに事實は忙がしいのであります。

無根氣と氣短

今日では段々と世の中が切迫して來たものでありますから、日本は今までは有難い國であるけれども人間が鍛錬されて居なかつた、だから何か難かしい事に出會ふとどうも根氣負がする。そこがどうも困つたことで、他の國を褒めるのではないが、獨逸は亂暴な事をして悪い奴ではあるがなかく根氣が宜い。或る人から聞きましたが、此頃獨逸では六十五哩も飛んで行く大砲の弾を射つて居るといふことであります。さう云ふ大砲を据附けるには三月も掛るさうであります。大

砲を据附けるには三月も掛るといふやうなことをやつて居るが日本では三日か四日で突撃して取つてしまはうと考へる。そこが大變違ふ。此頃九州へ行つて見ると石炭の出ることは非常に盛んなものである。私は専門でないから知りませぬが、日本の石炭は、今後六七十或は七八十年すると無くなる。百年は持たぬといふことであります。其七八十年の後はどうするのであるか、その等の事を考へて居るかと言つた所が、考へて居ないと言ふ。それなら此事を知らないのかと言ふと知つて居る、知つて居るが、其時にはどうかなるでせう、斯んなことを言つて居る。日本には斯んなやうな事が多いのです。

西洋の先見と努力

所が西洋ではどうか。英吉利では御存じのやうに、既に石炭が無くなつた時の事を考へて居る、石炭が無くなれば石油を使ふと云ふ事を研究して居る。獨逸は更に其石油が無くなつた後の事を此大戦の始まる四五年前から研究して居る、さ

うして其時には「メチールアルコール」を使ふ、併し是は容積が多つて火力が弱い、そこで其火力を強くすることを工風して居るのである。

日本と西洋の氣分の比較

日本では、石炭が無くなれば其時にはどうかなるだらうと言つて居るのに、外國では、石炭が無くなつたら石油を使ひ其石油が無くなつたら何を使はうと、先の事まで研究して居る。是が一緒になつて競争しやうと云ふのでありますから、ウツかりして居ると負けてしまふ。斯う云ふ有様になつて居るのであります。

間に合せの文明

今までは世の中が呑氣であつたから何でも宜かつたが、是からは何でも宜いと云ふ譯にはいかない。所が残念なことには、今までの世の中が甚だ呑氣であつた所へ、明治維新以來五十年の間に、歐羅巴の文明を滅茶々に輸入して、向ふ

て五百年六百年掛つてやつた事を四五十年で一通り間に合せた。間に合せる事を覺えたのである。間に合せること云ふ事は誤魔化すこととあります。閑だつた人が本當でなく誤魔化す事を覺えたのだから尙始末が悪い。閑であつた者が誤魔化す事を覺えてしまつたのであるから、ど

機微譚語

山根青村

六四、怨靈平九

元祿より享保の頃まで盛んに行はれたる俳優山中平九郎(俳名仙家)、或る狂言の怨靈を扮せんとして開場前一日我家の樓上にあり、獨り鏡に對ひ狂言怨靈の顔色身入れをさまざまに工夫し、兎やせん斯くやと眼をよせ口を開き心を練り思ひを凝らし、終に自身にも恐ろしき程の顔色身入れを工夫し出し、こゝぞ十分の思入れなりと思はすスツクと立上り怨靈の身振をする折しも、其の妻日長のつれづ

うしても一の仕事に魂を打込んでやるといふ者が乏しくなつたのである。一の仕事に魂を打込んで、人が見ても見なくても何でも構はない、やり掛つたら命懸けてやるといふ考のある人が段々減つて來て、巧に世の中を渡らう、斯ういふ人が殖えて來たのである。(まだある)

れにとて、煎茶を持ち何心なく樓に上り來りしに、思ひ掛けず此ありさまを見、アツと叫びてのけざまに階下に落ちて氣絶せり。家内の者此物音に驚き打寄りて氣付薬を與へ辛ふじて甦がへりぬ。さて平九郎は吾技神に入り我妻すら斯く氣絶するに至る、かくては看客を感動せしめんこと難からずと大に喜び、其工夫にて狂言を演ぜしに果して看客群をなし、前代未聞の大當りにて「怨靈平九」の名を得るに至れりとなん。(名人物語)

ルは飲むに堪へず、不忠實にして成功せしもの古來一もあるなし、自己の業務に熱中の結果、彼は狂せりとまで他人より批評せらるゝに至らば、モ一占たもの。信仰亦然り、法悦歡喜の情油然として全身心に洋溢し、擧手投足妙法と一如し佛祖と一如す、开處に人を動かすの力あり物を益するの光明あるなり、哲人は言へり自信教人信と、職に法教師の任にあるもの一段の自省なくして可ならんや、嗚呼他山の石我玉を磨くべし怨靈平九の入神の技。

聖語 何に日蓮祈り申すとも、不信ならば濡れたる火口に火を打かくるが如くなるべし。(御形書)

六五、高野の小僧

寶井其角歴遊して高野山に登り奥の院に詣でけるが、折しも秋の半ばにて殘んの暮さ猶ほ堪へ難かりければ、但ある坊中に入りて水を乞ひけるに、其庭に生ひ繁りける千草の中に女郎花の最なまめかしう咲出たるに、思はず縁に腰打かけつつ如何て一句をと詠め居たるを、此坊の

小僧十二三ばかりなるが見て愚しき顔して何をか考ふると云へば、然ればとよ此女郎花の餘りに綺麗ければ發句一つ詠まんとて考ふるなりと云ふ、發句とは如何なるものぞと云ふ、好し今詠みて見せなんと雖も懐より紙とり出て墨斗の筆もて「餘所に咲け高野の奥の女郎花」と書付ければ、小僧打見て大に笑ひ、斯る譯も分らぬことに多くの暇をつぶして考ふるこそ可笑けれ、殊に此句は最と無理なる云ひぐさなりと云ふ、其角心にをかしく何故無理なりとは云ふぞと問へば、我れ好く補して進ずべしと「餘所に咲け」と云ふ上句に墨ぬりて傍へに「名をかへよ」と書き添へければ、其角初めて其才に驚き、我れ遠く及ばずと舌を捲きたりとぞ。

(行脚集)

無理は通らぬもの自然は曲ぐべくもあらず、如何に宗匠なればとて「餘所に咲け」ではちと無理な注文と申すべく、「名をかへよ」と云へる小僧の申分如何にも穩當なり、舌を捲いて後生恐るべしと降參したるは當然なり、流石は風流の其角さらりと擡けて我を張らざる所に人格美



課題「萩盛」表

子爵 清岡長言選

◎天 千葉縣長生郡長柄村 渡邊 乾航

ひるもなほ蟲の聲して萩萩の

花盛なり露深き野に

◎地 京 都 安良 日將

夕へよりあしたは露もおきそひて

露の萩は今さかりなり

◎人 千葉縣山武郡東金町 福島 正之

春日野の男鹿の心まよふらむ

露もさかりの萩の花妻

◎佳作

◎積垣に今を盛とさく萩の枝もたわわにける白露

◎衣洗ふたらひの水にうつるかな今をさかりの白萩の花

◎通りなば花にやふれん通路も今を盛りの萩に閉して

◎大阪 長尾猶之助

- ◎こゝかしこ蟲の聲する草むらを錦となせし萩のまさかり 京 都 中野 正甫
- ◎白萩の今をさかりと咲く庭のかけにふみ讀むこゝろのきこゆる 靜 岡 佐原 弘風
- ◎おちたちて清めし庭の朝風に露の玉ちる萩の眞盛り 木 郷 熊澤 優子

○無序列

- ◎掃くも惜し掃かずは庭につもらんこぼるゝ萩の今さかりにて 常 陸 窪田 純榮
- ◎宮人を召して今宵は見ますらむ御園ににほふ萩のさかりを 三重縣 辻本紅葉子
- ◎風戦くみきはにわれをまねくこといまを盛りの萩の花つま 淺 草 山根 日東
- ◎山道の朝露分けて詣づれば妹が墓邊の萩さかりなり 名古屋 有田 龍陽
- ◎妹の墓の邊りの白萩は今を盛りと咲きにほひけり 名古屋 有田 信子
- ◎月かけにいとうるはしく咲き匂ふいまを盛の庭の萩むら 京 都 竹本 蓮一
- ◎咲そめてかつちるものをしつえよりたわむぞ萩の盛なるらん 本 所 勝田 宣和
- ◎杖を曳く道たにわかすなりにけり今をさかりの萩萩の花 下 總 星野 聖祐
- ◎苦むせるいはも錦をかざりつゝ今をさかりの庭の萩萩 小石川 竹内 軌榮
- ◎住みすてし家にも萩のまさかりであるじのなきも知らぬかほなる 小石川 松尾 周子
- ◎おく露に月もやとりて盛りける庭のま萩のうる

六六、一絶の佳品

細井廣澤人に誘はれて初めて新吉原の貸座敷に到りし時、此家の亭主廣澤が當時書名の喧しきを聞き居たるをもて頻りに書を請ふて止まざりしかど、廣澤は場所柄あしければ強いて辭されしに、再三再四請ふて止まざるにぞ、是非もななく「此處小便無用」と一行物を書き與へられぬ。主人は餘りにけしからぬ事と興さめ顔に悦ばずして取納め、重ねて乞はざりしが、斯くて其後晉子其角來りける折、主人は右の訣をなし取出て、示せ

聖語 花咲けば莫なる、嫁の姑となることの候ぞ。(寂日坊御書)

を發揮せり。今の世我儘氣隨の御大達、兎角は横紙破りの無理ばし連發して、他人に迷惑をかけ部下を困らせ給ふことなき歎、是が非でも一旦言ひ出した事は徹さて置くべきとの所謂因業頑張、それが筋道の正しきものならば兎に角、少しも平仄の合はぬ實行に不可能なる事にまで無理推しの一點張では少々あてられざるを得ず、心すべき事ならずや。

しかば、其角之を見てこのまゝ置んは無念なるべし、我れ書き添えんとて其下に「花の山」と書たり、于今二絶の雅品として人口に膾炙す。(古今雅法)

成程「此處小便無用」では如何に大家の健筆なればと、床懸の軸物には仕立られまじと「花の山」と三字を加へて一轉活躍、天下の名句となり無類の雅品と化するに、天下の名句となり無類の雅品と化するに、世には廢物利用と云ふ事あり、如何なる駄物廢品も活用次第にて一廉の功用を顯はすもの也、死物倏忽活物となる也、法華の開顯は這般の妙義を道破せる大教義也、女人は地獄の使と説き切りたる四十年の説を打返して、慈念衆生猶如赤子と女性の美點を顯示して、女人成佛の道を開くなど、絶妙の教義讚歎の外なく聖日蓮の四個格言も至竟は各宗徒が其因はれたる宗我の小見を打破りて、此妙に來らしめんとした慈愍攝化に外ならず、其他所有宗教、所有學説そが未徹底未究竟の部分的城寨に閉籠りて、その僻義に囚はれとなれば總て人文發達の支障ともなりつれ、之を開顯して書量の妙義に來らしむれば、一々皆活躍して一廉の御奉公

を奏することゝなる、げにや妙とは絶言
歎也。南無。
聖語 妙とは蘇生の義也、蘇生とはよ
みがへる(轉活)義也。(法華題目抄)

松尾鼓城に

在大連 江見乾丈

松尾先生台覽

先日は御書書を頂きまして有難う、その中に東京は暑いといふ文字が異様に私の頭を刺戟しました。成程東京は暑い處であつた殊に貴下が筆を揮つて居られる邊は、太陽の恩恵を直接により多く受けて、木々の葉一枚も動かない、燈かされた鉛の様な内に、まだ騒しい蟬の聲に攻め立てられる、身體中の水分といふ水分は、すつかりしぼり出される様な感じがして、やたらに扇扇や扇子を使つては、なまぬい湯を作つて、其中に唯暑い〜と繰り返すばかりであつた事を想ひ起します。よく人から滿洲の地は非常に暑い、焼け焦げた土で作つた赤山ばかりだ、と聞いて居ました。また滿洲は時候が悪いから身體を大切にせよと、親切な言葉も聞きました。一向に暑い事を感じないし、また内地で味ふ事の出来ない濕氣を含むだヒヤリとした風に思ふ存分袖を吹かして居ます。然し此の涼しい風は私一人が受けて居るのでなくて、埠頭に或は街の上に働いて居る支那苦力も總て此の恩澤を蒙つて居るのだら

う、いや此の大陸の一角に住むて居る日本人も外國人も一樣に受けて居るに相違ない。いや働いて居ても働いて居なくても此の涼味は自由に入受けて居るに相違ない、平等一如でなくてはならぬ、此の涼味は日本人には未だ嘗て味はれなかつたものであらうか、日本人には夏は暑くて働けないもの畫殿をする時季だとして考へて居ないのではないか、そして暑い盛りに(見る者が暑い盛りと感ずる)支那苦力が働いて居るのを見ては直ちに、彼等は日本人中によくあるその日稼ぎの働かないとその日の生を支へる事が出来ないものが、止むなく働いて居るものを見るが如くに、氣の毒がつて見て居る。

彼等苦力には彼等自身に強い人生觀を持つて居る、勞働に對しては相當の報酬は要求するが、米價暴騰といつては、その日を支へる事が出来ない様な生活は決して仕て居ない。幾度か變遷した國體によつて變はれ來つた個人主義の觀念は共和國を作つても尙ほその色彩が濃く露はれて居る、それ自身に於いて永遠の生命を續けようとして居る。或は肉體的方面のみかは知らぬが事實弊衣を纏ひ、粗食に舌鼓を打ち得る丈の觀念を養つて居る。日本人には元來大昔から瑞穂の國に變はれて大陸に於ける様な、あらゆる人種の刺戟を受けずに順調に育つて來た恩恵に馴れて、貴族の家に生れた小兒が下女を食はずに啞然として居る様な、馬鹿氣な事に困つて居るのだ、それだから日本には確實な宗教信仰を有つて居るものがない、上に立つ、世を指導して行く政治家、教育家には信仰が少ない、宗教にしても最も生活の不安定な鎌倉時代に宗教が盛んであつたのみである。

此の様な時代を繰り返した國民には、獨立して立つの氣概がなく、即ち久遠實成の御佛の實否佛陀と共に住するの觀念なく、やたらに、外來の物に目を置かずのみである、日本在來の衣服にて西洋人に伍して立派にやつて行く人は少ない、何日も西洋人の禮儀に司配せられて、また自ら之に司配せられる事が最も早く新知識を得たるが如く考へて居るのは遺憾千萬の事である。

「天下の志士、聰明と英才とを有せざれば乞食とはならぬ」と大言し邁歩し得るものを欲する、自ら水を汲み薪を拾つて佛弟子となるの士の擧出する事を希望して止まぬ、現代の苦しみの渦の中に揺蕩として、日蓮主義の輪印鮮かに高調せられむ事を切に望みます。泥中に深く根を張つて而も泥を超越した蓮華を作らむ事を御宣傳を願ひます。

(滿鐵圖書館内にて涼風を受けながら)

影山謙二氏より

關西各地に於て數百名の讀者を募集する等本誌の發展に對し多大の精力を致されたる影山謙二氏は目下病病に侵され郷里美作に靜養中なるが本月十日日本誌松尾主任に對し一書を寄せらる。

『拜啓朝夕はよほど浸宜相成申候處愈々御清露爲道來大賀候又手賣著『投入と盛花』到着來熱心拜讀仕候結果本日自ら山野を涉りて萩を探り來り親ら花類に萩を挿し候に小生が花を生ける杯は今生に於て今日が始めにて候。願へば日蓮主義の信仰も十九年前に尊兄の教導にて薰發し花道の一

端も斯く申候通りに候。ア、契りの深き事にて候。目下病羸の身、日々幾部づゝの運動にも相成(花が)奉謝候々々



本誌會計正直の一例

附五島の教況

本誌の會計に就ては最も正確を期しつあるも、何分多數の事故時に誤りなきことを保せず、斯かる場合には一應の注意を受くることは、會計部の最も喜ぶ所也。過般長崎縣五島増田智融氏より多數料金の納入を發見し直に會計部よりその

はしき哉 千葉縣 萬新舎一止
○柴の戸をひるさへかたくとさしつゝ塵もすへし
な萩の盛りは 綾部 大槻助次郎
○影うつる色さへふかしあき萩の花さかりなる野
路の玉川 下 總 春日よし子
○杖ひきてたれもとひくるむさし野のまはきの花
の今さかりなる 下 總 林 ちし子
○を鹿ふすかた野の小道わけ來れば今さかりの
萩のはなつま 千葉縣 小川 蔵司
○花におく露さへにほふ萩の野にいまをさかりの
萩の花かな 千葉縣 醍醐 榮司
○萩の野にたかおりにかけし唐錦露もさかりの萩
の花 千葉縣 笠見 榮也
○朝風にさふたる鐘のつたへきて眞さかる萩のほ
ろうちりけり 小石川 松尾 清明
○追 加 選 者
朝夕にこぼるゝみれば庭の面の
はきの花こそさかりなりけれ

次號「深山鹿」

○ベ切月末まで
○投稿所東京小石川區白山前一七統一編輯所
▲天位には選者の短冊を呈す
▲短冊御受取の方は其旨御通知を乞ふ

Table with 2 columns: Title and Author/Location. Includes entries like 蛇病く這ひるる南瓜の清説 (上 總 堀江生), 南瓜の尻に蟻の這ひるる夕陽説 (同 堀江生), etc.

Table with 2 columns: Title and Author/Location. Includes entries like 蛇病く這ひるる南瓜の清説 (上 總 堀江生), 南瓜の尻に蟻の這ひるる夕陽説 (同 堀江生), etc.

過入金なる旨を申送りたるに對し、同氏より左の如き返書を得たり。私信なれば掲載如何やと思ひたれど、本誌事務員が如何に各面に對し細心の注意を拂ひつゝあるかを證せん」とす。

前略「普通養利を目的とする雑誌社其社に都合よき間は可成過當するが世の常なるに拘らず、貴社の今回の御照會に對しては殊更本多現下日頃の御調陶の偉大を敬伏仕候、小生も宗門發行の雜誌は多數購読致居可成の前金拂込の考へを以て發行致居候處、誌料計算書を請求候も何等の回答なき社も有之、今日貴社の如きは實に感服仕候、毎回現下の御講述は信讀仕居候、近頃は法華經講義拜讀下下の御偉大に感泣仕居候、右等信感の顯はれとして本月五六兩日を以て長崎縣立中學校教諭文學士西田直氏の御來光を仰ぎ高等小學校に於て日蓮主義御講演を仰ぎ非常なる盛大を極め申候、右反響として村長平田又六氏御主眼に觸れ餘程感激の極に御座候、尤も小生は不肖ながら、一昨年在任以來毎月一回日蓮主義研究會開催御教誨仕候、感激者顯れ大に努力仕居候、右大法の爲め御喜び被下度候、因に右西田氏は今日長崎市出發三保講習會へ參列の由拜承仕候非常の信仰家にて世に得難き良教諭に御座候、門流は異り候へ共同一御主義を奉ずる點に於ては心強く感入申候。」後略。

廢讀者に對する感じ (同人)

「統一」編輯の整理をする時に、永い讀者が死亡されて其の編輯から之を除去し發送簿から之を剔引くときの氣持は何と云へぬのである。思はず無難法運筆と合掌せずは居られぬ。しかし之はまだ死んだ人だと思へば思ひ切も出来るが、永い愛讀者が其人の都合といふ都合で廢讀者に對して編輯から其記名を除くときの心苦しきは譬へやうがない。中には故

行とか何とか止を得ぬものがあるが、永い間の法悦の禮を叙言して廢讀者の人に對しては實に忍びられない力の落ちるやうな氣がする。

●信州飯田より 當地方は基督傳道盛んなる土地なるに反し、佛敎は睡眠の狀態にて少しも傳道して居りません。基督は先日大天幕のウルツクススの一行が來まして多くの信者を得て行きました。當地方の二新聞紙までが基督化されて舞を弄して愚民を惑はして居るやうな譯でありまして。日蓮主義にては國柱新聞、法華其他の雜誌を合しても僅かに四十名位のものです。私共は少しも力がありませんが御講の勢力の下に、幾分奮したいと思つて居ります。(高坂興三郎)

熊井本光師の送別會及赴任

熊井本光氏は東京大學卒業後東京市に在りて統一閣講演の外に自ら敎會を作り熱心布敎に従事されつゝありしが、過般師範たる上田智軍師の願本法華宗神戶布敎所より、大阪蓮成寺住職として榮轉せられたるにより、同氏はその後任者として管長より特命せられ、其爲め東京寺院側にては其行を壯くにせんとし、野口、今成等の諸元老發金となり、七月廿七日午後四時統一閣に於てそれが送別會を催したり、會する者今成、笠川、森川(日修)、關田、石渡、池澤、山根、伊保内、田島、堀木、松田、大須賀、笠原、鈴木、石川、井村、大森、野口、三橋、木村、高木、中村(日錦)の諸氏及び本誌松尾等の廿三名にして、先づ關田氏開會の辭を述べ、次で野口、山根、松尾、鈴木、中村、堀木、森川、今成の順序にて拜詞且つ激動的送別の辭を述べられたるは近來に見ざる値なる會合なりき。清夜後記念の合作をなしたりしが、中村氏は「神の月に輝りてうれし夏月の月」の即吟ありて萬歳祝に散會したり。尙前記の諸師は熊井氏に對し略裝一領を記念として贈りたり。

△神戸の入山式 前記の如くなるを以て、熊井師は六日東京出發七日午後一時同所に於て、萩原木山

▲南瓜の先づ一刀の勇氣 鼓城

菊合せ

、菊合せ實頗も持參かな 孤峯
、名僧の高く笑ふや菊合せ 笑月
○評 以上二句は雙眞俳句會員中より選拔す。笑月君の名僧の高く笑ふが不調和にも考へられるが、再考して意味のあるものにもなる。他の十二句は失敬しました。

▲評 米騒動の中にも風流は別と見える 直水
、菊合せ先づ銀君の御手より 孤松子
○菊合女官召さるゝ、藤の内 同
○菊合菊に明るく灯り輝く 觀江生
○評 その黃に於て其の白に於て 慶山
、説話た羽織に菊の匂ひ散 鐵橋
○紙札に最期を送げん菊合せ 青村
○紅葉の紙札もあり菊合せ 鼓
▲一等符くゝらへて菊合すみに鬼

次號課題

○神樂(かぐら)
○燒芋(やさいも)

▲九月二十五日迄に小石川白山前町一七松尾鼓城宛にて

新傾向之句

照 江

魚の香のいさゝか水に暖かき小春
吹かれし雲のわたまき冬風風の輝き
砂にかへるグチヨウの朝日水かな
うそ寒や宿直の人の物語りぬ
落雷後の物静けさを様立てり
夕ざれの街道電燈りて鳥歩く

部長始め中川日吏、川崎英照、吉永日洋、京義義應、星賢の諸師參列盛大なる入山式を擧げらる。同日は朝來風強く時模様なりしにも拘はらず、老幼に至るまで打連れて同師を迎へて修法式典を終りて後、折柄來會の前任上田上人の挨拶あり。次に熊井師(與會同心)の御遺文を拜讀、一場の講話を以て赴任の辭に代へたる今回の事も急遽の受命にすれば、行李勿々各所への通知も思ふに任せず、又神戸に於ても時勢に難み、殊に御來着と同時に儀式を済ませたることなれども、龍仁、原田、高田、金光、京藤、桔梗及牧田の諸師より祝詞又は祝電を寄せらる。式後一同に折詰瓶酒の饗應あり、和氣瀟々裡に散會せしは午後六時頃なりき。當日東京の信者清水文次郎氏は熊井師を送りて共に來前、此式に列せられたり、本多管長親下には同師赴任の記念として金言「斯人行世間能渡衆生閻」を揮毫せられたれば、同師は之を扉面に上梓して信徒並に知己に贈らる。眞に好個の記念と云ふべし。

神戸の教況 當地方は東洋第一の開港地にして、人口六十萬以上に達し數年の中は我都市第三位に迫むることも亦過言にあらず、實に前途有望の布敷開拓地なり。從來の信仰者として西田兵左衛門、名村房次、辻俊泰、吉岡正太郎、牧忠島、山形勝一氏等中堅としてあり、又三百萬長者として名ある跡跡出身水田章氏今當水閣として衆望を負へり、其外熱心家林の如く繁り、近き將來に於て東京統一閣以上の講壇場建設されんとす、而かも今熊井師赴任の赴任を見たれば信者側にも頗る勇氣を鼓し諸計畫も急に進行することとなるに至らる。

小西憲三君の渡米、統一閣の送別

佐平、風雄、日喜の三氏を賞見として有する憲三氏は本年大法科を卒業し、直に三井物産に入社し、來廿五日渡米の途に着くこととなるが、同氏は頗る明瞭にして文章辯舌共に優邁、將來ある人物として目せらる。以上吉岡正太郎、水田四郎兩氏通信のものを參酌して掲出したなり。

れつゝあり、去る二日野口、關田、高木、松尾等の諸氏發起人となり午後四時より送別の會を開く、先づ本尊の御寶前に野口師導師として同氏の爲に心身健全發展成功の祈禱をなし、終つて開會關田氏送別辭を、之に對し令兄左平氏、憲三氏の答辭あり、宴に移つてより野口日主、伴大尉、松尾鼓城、高橋卯三郎、佐藤重賢、森川泰秀、高木本願、小西日喜の諸氏の順序にて各自送別の氣緒あり、記念品として法華經、高祖御遺文其他數冊を贈り、萬歳を祝して散會したり。近來稀に見る勇壯なる建會なりき。因に當日佐平氏を憲三氏と共に招待したるは、佐平氏が克く家兄としての義務を盡し、三弟をして何れも高等學府を卒業せしめたるは稀有の事なりとしてなりき。

●顯本宗學會の小西君送別會 宗學會の革新に多大の功勞ある終身會員法學士小西憲三君が近々米國組育へ赴任せらるゝに就て、有志相謀り送別會を開いた。其概略を報せば、九月六日午前九時を期し押上京成電車發着所に集合したる一行は、山名日宗師、横山、野間、内田、下妻、高矢の五理事を筆頭に當日の主賓たる小西憲三君を合せて二十四人であつた。押しを發したのは九時半、會場に當てられた市川町の市の家へ直通すれば僅か十分の處を懸々柴又方面へ迂回して川上から舟を仕立て、利根川を下つたのは準備員は意匠に出たもので大當りであつた。鴻運、市川町、水泳場を左に眺め、右には岸に沿つて糸を垂れたる釣舟の點々畫の如き見ながら、二百十日も程かに嵐風の懸念を去れる好天氣に輕風水面を渡り來て伏を吹き響る心地好き、濁瀾爲に洗はれて御座清涼を覺ゆ、同信の友交同舟の環境と快て和氣瀟々舟の流るゝを知らず時移るを覺えずして會場裏手の棧橋に着いた。此處には高砂から別れて先發した人々に依り諸般の準備を整つて居る、一同入浴が済むと(十一時半)新二階設けの廣間に於て、大本尊安置の御前に端座處修、小西君の旅福安全と成功とを祈り、山名日宗師からは懇々送別の御話があり、續いて高矢順一氏の

統一閣外運動

▲八月二十日 晴
▲八月二十五日 晴
▲九月十一日 晴
▲八月十八日 晴
▲九月二十五日 晴
▲八月二十五日 晴
▲八月二十五日 晴

送別の辭ありて小西憲三君は肅敬なる態度、莊重なる言辭を以て答禮の詞があつた。其れから配語となり宴會に一同耳熱するの頃山名師の考案に出たる新趣味に富める編引があり數語笑聲起り感興盡るを知らざりしは午後三時半と云ふに萬歳聲裡に市野家を出て、之より真間の弘法寺に什祖の古跡を訪ひ、再び市川に出で、押上に歸りしは六時半、此處にて散會(因に本會より小西氏へ饋別として旅行靴を贈呈せり)内山生報。

●統一閣日曜講演 講題「日蓮上人の人格を中心としたる修養論」

▲八月十一日 晴
▲八月二十五日 晴
▲八月二十五日 晴

▲統一閣幹事 是歳に第一回地方遠征を宇都宮に試みたるが第二回を互相地方桐生足利方面へか試みんとせしが地方暴動の爲め延期せり。

▲地方信者 にして懸々出京當國を訪問せられたる者長崎縣一人鳥根縣一人北海道二人薩摩一人香川縣一人若松一人ありたり、何れも奇特の信者なりし。

▲統一閣講師慰勞會 九月一日午後四時より統一閣樓上に開かる總裁本多現下は齒痛の爲め缺席せらるゝも野口日主師其他諸講師は懇々集會なりし。

▲總裁本多現下 九月八日より登閣以後毎日曜日午後一時より統一閣に於て獅子吼せらるゝ事となれり。

▲團員親睦會 を設け毎日暇演終了後、統一閣樓上に於て晚餐を共にし日蓮主義研究或は所感を述べらる事とせり。

那春水町二丁目綿久事加藤虎太郎氏宅に於て日蓮主義講演、高木木順氏の次に小笠原丁氏、次に松尾誠城氏...

本山妙満寺、八月布教通信

八月五日、明徳學園、本尊講 萩原啓門 十日、倉富宅、時局對する日蓮主義の態度、金光孝碩...

名古屋支部 四日市分團法界の概況

既報の如く、四日市分團は歩武漸進法運の進轉向上を見るに至れり。當市は爾來日蓮宗の教義宣傳は極めて不振にして...

の如く統一團の畫策により佐藤中將閣下を聘し國民思想の大講演を開催せしが、今夏は八月三日四日の二日間...

名古屋教信

○八月八日夜(日蓮主義講演會常徳寺)「法の勝利」教育家大日金三郎、「道」木村令快...

妙善寺檀家の善施

妙善寺住職小竹俊雄師は客年同寺新築施主より新築菩提の爲め贈分金品寄捨美舉の善例を開き、其節莊嚴品...

演會は休止の姿なりしも(新に加入の者の爲め經文練習のため毎土曜日には團員集會す)今回復興、且百尺...

片貝尙風會

山武郡片貝尙風會に於ては二十四日午後一時より會員死亡者十六名に對し今回町團法人の認可を受ける記念として追悼會を、野口僧正大導師...

米暴騰と寄贈金

東金統一團支部團員小川莊三郎、片岡善助兩氏は今回米價暴騰に際し細民救助の爲各寄百圓宛を寄贈せられたりとは誠に奇特の美事といふべし。

妙徳寺講演

山武郡北之幸谷妙徳寺に於ては廿五日午後五時より講演を開き、自我偽語話(續)を竹内無著、日蓮上人の教義(續)を成島日衛兩氏の講演あり...

「伊豆法難」「塚原法難」「龍口法難」の統一節あり難衆一百非常の盛會なりし。

支那例會

七月十八日山武郡東金町片岡氏宅に於て支部例會を開き修法の後午後八時より妙福寺に於て講演を開き、金坂布教師「開會辭」を、成島日衛「七月の聖訓」を、竹内無著「道徳と宗教」を講演す、尙夜は舊七月十二日に當れるを以て參拜者多数これあり此れ又盛會なりき。

片貝小學校々友會

八月四日(舊七月一日)千葉縣山武郡片貝小學校に於ては校友會を開き、菅井校長の開會に次ぎ教育に於て「土屋眞容」修業の第一義を成島日衛「道徳と信仰」竹内無著兩氏の講演あり、餘興としては擊劍等あり、會員約三百の出席にて尙村有力者も多数列席せり。

栃木縣下の宣教

八月十六日午後二時宇都宮市法華寺開會 一開會の辭 大川圓精 一宗教の本領 征川僧正 一總法主旨 大根田瑞海 一健全なる思想 征川僧正 八月十七日午後二時寶積寺蓮性院開會 一信仰の妙用 征川僧正 八月十七日午後七時大新田小學校開會 一青年訓育 征川僧正 八月十七日午後二時東高橋淨林寺開會 一國家と宗教 征川僧正 八月十八日午後八時右所開會 一光 征川僧正 八月十八日午後八時右所開會 一偉人の靈光 征川僧正 八月十九日午後七時茂木町本開會 一修業の道 征川僧正

宇都宮安國會の夏期講演

赤裸々の告白

本誌經營と 主任 松尾 鼓城 活版部の方から又々本月より印刷費三割以上の値あげを申して來ました。活版屋の方で値あげを幾らなりとするのは御勝手だが、此方は收支が引合ぬことになつて甚だ勝手が悪くて困ります。何分三年前假りに五十圓の印刷料であつたならば今は約貳百圓を支拂はねばならぬのでありますから、やり切れませぬ。しかし此上誌代を上る考はありませぬけれども雑誌の方も誌代の這入ぬものや何やかやして何しても經濟が持てませぬ此處で何とか方法を考へねば焦りつきます。それで結局經營者としては左の四方法の一を選んで此經營をやるより外に道がありませぬ。

- (一)廣告を得る事(利益を得る廣告) (二)誌数を増すこと(副費が廉くなる) (三)寄附金を得ること (四)自分に働いて金を儲ける (一)の廣告は宗教雜誌として今の體裁では兎ても得られぬから駄目、(二)は擴

張費が費るから駄目、先づ(二)かと思ふが、之とて永久的には駄目だし何だか目當がない。然らば(四)の方法が一番安全であるが此方法としては二つある。

- (1) 畫を描く事(自分は故山岡米華及勝谷米莊に請書を學んだ)
- (2) 著述をする

右の二を考ふとしたら、雜誌統一を管理する以外、今の總ての事件から脱出せねば否、皆外の仕事から遠ざからねば畫など描けるものではない、此に於て一考せねばならぬことになる、それで今少し考慮します、考慮しました上で何とか赤裸々と發表して皆様の御賛助を得ることに致したいと存じます。

○次號から、雜報は思ひ切つて要略するかも知れませぬ、惡からず御承知を乞ふ。

生花、教授 毎土曜午後 投入盛花 統一閣に於て

廣告

來る二十四日午後二時より

日蓮主義講演會

淺草區新福井町顯本宗學會本部に於て祖國を去るに當りて法學士 小西憲三君思想調節と其根本問題に就て山名日宗師

貸ふとん

貸ふとん業者の相談に應ず

野島 連平 (淺草區田中町一六六番地)

- 醫科用印刷物一般
- 醫科器械 一般

東京本郷區 高進堂 春木町二丁目

- 實用安全眼繃帶製造
- 新案複寫式屈用紙發賣
- 全國各病醫院御用達

高野醫院

白石前町

布 眼の藥 效能、たぐれ目、かすみ目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等 定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓

布 血の藥 定價壹袋、拾錢、貳拾錢 產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、千葉縣山武郡源村上布田參百番地 藥王寺

布 眼の藥 本舖 齋藤 日章 (御注文は總へて下記振替に)

(振替東京第六七九一番)

●本誌掲載の廣告店は皆信用あり確實なる良店舗なり御信用の上御注文あれ

日宗法衣專門 青雲帽 青布靴 袴 飯田法衣店

京都市佛具屋五町北 振替口座大座八四七



加賀 料理 加能亭 日本橋區坂本公園

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下され候儀に候

京都 三條通鳥丸東入ル町

草木本店 電話中七三五番 振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地

草木支店 電話下谷三四三四番 振替口座東京二四五六八番

御用達 普通品定價郵券貳錢封入送呈 總本山身延山 總本山妙満寺 大本山本國寺 日宗各教團

佛像佛具 調度所 位牌木鉦

宮殿幢天蓋其一式

御用達 京都寺町四條南大雲院前 辻井岩次郎 振替大阪八一五七番 電話下三二五八番

舊名「乾清」師 多少に限らず御用奉願上候也 (御用仰せ被下候は、叮嚀深切を旨と致候)

位牌木魚卸小賣

●御來店之節ハ陳列場へ御來車被下度是迄トハ一層勉強仕リ



各本山御用達 佛像佛具 一切卸小賣

定價表郵稅四錢 小賣部 京都三條小橋東入南側

三法堂佛具陳列場 長距離電話中七七八番 振替口座東京貳〇七五九 大阪四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入

本舖 三法堂 藤田總治

交換廣告及義務廣告御斷り

みたから

▲九月號出づ

以後申込者に限り送附することとせり

○轉住廣告

今回左に赴任仕候 神戸市兵庫大開通六丁目 題本法華宗布教所

熊井本光

念珠ならば小野嘉助店へ

日蓮宗各本山御用達 顯本法華宗妙満寺御用達

御念珠各種 弊店の特徴は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候

念珠商 小野嘉助 京都市寺町通蛸藥師下ル

電話中二六〇八番 振替口座大阪一九七二〇番



(號四十八百二第)

- 法華經と顯微鏡 主任 松尾鼓城
- 自慶安住 大僧正 本多日生
- 日蓮聖人教義綱要 僧正 井村日咸
- 法華經流布の時代 文學士 小林一郎
- 機微譚語 土佐小操 山根青村
- 日蓮主義の本領 沙門眞達 金坂教隆
- 課題和歌發表 子爵 清岡長言選
- 陽數と陰數 營口 利生堂蓮子

發行事務取扱所 東京市小石川區白山前町 統一編輯所
振替口東京三五三番

大 僧 正 本 多 日 生 師 著

大藏經要義

賜天覽 菊判洋裝上製函入美本 正價各壹圓八拾錢 內地送料 三方金每卷四百頁以上 各拾貳錢

- 大方廣佛華嚴經(四十卷) (一)緒言 (二)此經の要文
- 大方廣佛華嚴經(六十卷) (一)緒言 (二)此經の要文
- 華嚴重譯經の對照 大方廣如來不思議境界經
- 大方廣佛華嚴經不思議境界分 大方廣佛華嚴經修慈分 大方廣入如來智德不思議經 度諸佛境界智光嚴經 佛華嚴入如來德智不思議境界經 大方廣普賢所說經 信力入印法門經 大方廣總持寶光明經 大方廣圓覺修多羅了義經
- (一)緒言 (二)此經の譯者 (三)此經の五支 (四)此經の通覽 (五)全文の講述 (六)此經の大意 (七)此經の頭讚 大寶積經 (一)此經の通覽 (二)要文の講述(卷一至卷十八)

○本書は隔月發行十八卷(三ヶ年)完結、一ヶ年前金九圓半年間五圓、送料不要、卷九迄三百六十五頁千二百二十九卷、卷六迄三版、既刊目次は本年七八月本誌廣告に掲ぐ

新刊 日蓮聖人正傳

四六判 聖人肖像等入 振替名附四百七十餘頁 正價金九拾五錢送料共

本書は最も確實なる史蹟に憑り、聖人一代の經歷と主張とを詳叙す。特に聖人の主要たる著作に對しては一一その内容を紹介し、又時代の背景たる承久の亂と蒙古來とに關しては正確なる史實に徴して之を記述し又後人の添加せる怪誕不稽の記事は悉く之を刪却せり。聖人を敬慕する家庭、修養の力と思想の光とを得んとする人は、速に一本を備へらるべし

明治三十三年二月二十四日第三種郵便物認可
大正七年九月十五日發行(毎月一回十五日發行)

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

版五 日蓮主義

三五判洋裝函入眞鍮挿入 美本六百五十頁正價金九拾五錢送料六錢

版四 修養と日蓮主義

三五判洋裝五百六十頁其他正價送料共同斷

版再 國民道德と日蓮主義

三五判洋裝四百七十餘頁其他正價送料同前

人と教

四六判洋裝函入眞鍮挿入振替名附 美本三百八十餘頁正價金壹圓貳拾錢送料八錢

版再 法華經の心髓

四六判洋裝振替名附四 百二十頁正價八十錢送料共 項目八十八ヶ條

大藏經要義刊行會